

脚本

「マッチの火を灯して」

安澄
リカ

《あらすじ》

店も住居も失くした、料理人の友造と妻のあかり。

台車を引いていると、改装中の店舗が目の前に。

無断で入って、建築屋と鉢合わせするが、オーナーと勘違いされ、事実を言い出せず、本当のオーナーが現れないまま二人は、以前一緒に料理見習いで働いていた望も巻き込んで、ついには店をオープンさせる。

《この脚本を書いた経緯》

夢の中で見た話を元に書きました。

《本編文字数》

7600文字

人物

町田友造^{ともぞう}（38歳）料理人

町田あかり（38歳）料理人の妻

尾越（32歳）建築家

日野（25歳）建築スタッフ

日野の同僚（25歳）建築スタッフ

増田（？歳）オーナー

芦田望^{のぞむ}（29歳）料理人見習い

○目黒界限裏通り（夜）

人通りのない道を、男女二人が重い荷台を押しながら歩いている。調理道具が山積みになった荷台を隠すようにカバーしている。

○目黒界限裏通り公園（夜）

マッチに火を灯す友造。手を温める。それを見る、あかり。

あかり「何してんのよ。」

友造「何って、手温めてるの。あちちっ。」

あかり「しょもな。：どうすんのよー。」

友造「どうするって言われてもねえ。」

あかり「行くあても無いのに、こんな重い荷物引いてさ。」

友造「あーあ、この腕の良い料理人を雇ってくれるお店どこかにないかなあ。」

あかり「あんたがオーナーにタンカ切るから追い出されたんでしょ！」

友 造 「だってさ、食材ケチるから。

もっといういい食材使わせろって言うっただけじゃん。」

あかり 「せっかく一緒にやらないかって誘ってくれて、私まで雇って貰ったのに、私も辞めるはめになったじゃないの！

しかもお店の二階に住まわせて貰ってたのに！」

友 造 「給料安かったから、その代わりだったんだろ。」

あかり 「収入も無くなって、住む家も無くなっただじゃないの！

せめて次の仕事見つかるまで、とか言えなかったの？」

友 造 「俺の腕を認めようもしない、あいつの顔はもう二度と見たくない。」

あかり 「子供か！こんなことになっちゃって、私は望くん置いてきちゃったのが心残りだよ。」

友造「うん、それは俺も。」

○（回想） 飲食店内厨房（昼）

友造の下で一緒に働く望（この回想で顔は映さない）。

望に料理を教える友造。

望「友造さん。これ、切り終わりました。」

友造「お、望、上達したな。」

望「まかない出来ましたー」

あかり「上手にできたね！」

談笑しながら、まかないを食べる望と友造と

あかり。

（回想終わり）

あかり「望くんも連れてこれたら良かったけど。」

友造「あかりのへそくりでさあ、住居付きの店舗借りてくれないかなあ？」

あかり「お店やるのに保証金とかリフォーム代とか、大金かかるの。」

それを貯める為に働いてたんでしよ。

それなのに友くんが高い食材買い込んで、私も美味しいもの好きだし、友くんの料理美味しいから、ついつい財布の紐が緩んで、全然無い。」

友造「本当？」

あかり「うん。」

友造「全然？」

あかり「全然無い。」

がっかりする友造。

あかり「寒い。」

友造「(マッチに火をつける)

あったかいぞ。」

あかり「マッチ売りの少女じゃないんだから。」

友造「これで願い事言えば、叶うかな？」

あかり「でもあれって現実じゃなくて夢の話

∴」

マッチの火の向こうにステキな灯りのお店、そのお店を見つめる二人。

友造「あっ！」

（熱くて火を消してマッチ捨てる）」

○目黒界限裏通り 飲食店・表（夜）

こじんまりした街頭に照らされた雰囲気のない店の前。

改装中かカバーしてある。

あかり、お店の前に止まり、建物を見つめる。

あかり「（独り言）すてき。」

店の中に入る友造。

あかり「ちよっと！」

勝手に入ったなら怒られるわよ！

（友造の後を追う）」

○飲食店・店内（夜）

電気をつける友造。

カウンターと古いテーブルとイスの客席がある。

オープンな厨房は真新しく、何も置いていな

い。

友 造 「やっぱりお店だったんだよ。」

あかり 「これからオープンするのね。」

友 造 「：何作ろうか？」

あかり 「は？何言ってるの？」

友 造 「妄想だよ。」

これからこのお店をオープンする。

メニューは何にする？」

あかり 「ばかばかしい。」（お腹が鳴る）

友 造 「ほら、今、何食べたい？」

あかり 「：友造の：ハヤシライス。」

友 造 「ハヤシライスでいいの？」

あかり 「：うん。トマトいっぱい入って、つ

ゆだくで、食べても食べても、また

おかわりしたくなるの。」

友 造 「：前菜は？何作ろうか？」

あかり 「そうねえ、*****。」

尾 越 「あー誰かいますか？」

あかり 「あっ！」

友造「あ、これは」

尾越「もしかして増田さんですか？」

友造「あ、はい、町田です。はい？」

驚いた顔で友造を見るあかり。

尾越「初めまして。私、このお店の改装工事を承りました、尾越と申します。

増田さんがご依頼した建築家の若松さん、売れっ子だから忙しくて、僕のとこに回してくれて。」

友造「：あ、あー、そうなんだ。ん？」

尾越「増田さんみたいに、良い素材なら糸目はつけないって、しかも先払いして頂いて、そんなお客さん中々いらっしやらないんで、僕嬉しくて！
精一杯やらせて頂きますので、宜しくお願い致します！」

友造「そ、そうなんだよねえ。

いい素材の食材があれば、どんな料理が作れるかワクワクしてきますもんね。」

尾 越 「増田さん料理もなさるんですね。

腕の良い料理人を雇うらしいって
若松さんから聞いてました。」

友 造 「腕のいい料理人？

ここにもいるんだけど：」

あかり「もーこの人何でも素材とか食材とか、

こだわっちゃうんですよ。

だからお金ばっかかかっちゃって。」

尾 越 「それだけ頑張ってる稼いでらっしゃる

からいいじゃないですか。

僕らもそのお陰で、お仕事頂けるの

で。(笑顔)

全部お任せでって聞いて、私の方で

どんどん進めさせていたただいてお

りますが、こんな感じで宜しいです

か？」

友 造 「い、いいんじゃないかな。

な、なあ、お前もそう思うよな？」

あかり「何言ってるのよ！（小声）」

尾 越 「奥様でいらっしゃいますか？」

あかり「あ、は、はい。」

尾越「奥様からも、ぜひ、女性のお客様の目線でご指摘頂ければ。」

あかり「そ、そうねえ。」

こ、この灯りなんか、落ち着いた雰
囲気でステキよ、ね。」

尾越「さすが奥様！」

お美しい上に、お目が高い！

これはデンマークのプロダクトデ
ザイナーのランプなんですよ。

シンプルなのに、温かみのあるフォ
ームが良いですよ。」

あかり「あら、わ、私もそう思ったのよ。」

頬を赤くするあかりを見る友造。

友造をにらみ返すあかり。

あかり「あの、2階があるみたいだけど、客
席があるんですか？」

尾越「いえ、2階は住居になっていて、若
松さんから聞いた話だと、料理人さ
んを住居付きで雇うって、増田さん

から言われたそうですが？

（友造を見る）」

友造「そ、飲食店は夜遅くて大変だろ。

タクシーで帰ったりさ。

2階に住まいがあれば便利じゃな

い。」

あかり「あ、料理人で決まったのかしら、ね

え？」

友造「俺に聞かれても分かるわけねーだろ。

いやっ、あれ？

どうなったんだっけなあ。」

尾越「えっ？若松さんからは、まだ料理人

決まってるって聞いてましたけ

ど？（友造を見る）」

友造「ん？」

尾越「？」

友造「ん？あーそうだ、忙しく頭こんがら

がっちゃった。

まだ探してるんだけどね、中々これ

っていう料理人がみつからないん

だよね：うん。

僕やっちゃおうかなーなんて。」

尾越「あ、そう言えば、外になんか沢山荷物が置いてありましたけど、あれ、もしかして、ここで使う調理器具で
すか？」

友造「あ、いや、そ、そうなんだよ。

お店たたんじやったからね。

あ、知り合いがね。

じゃあ、それ貰おうか？なんてね。

ね？」

あかり「ね？じゃないわよ。（小声）」

尾越「さすが、稼いでいる人は出すところは出して、使えるものは無駄なく利

用する。素晴らしいー

うちらで運びますよ。

おい、日野君！

外に置いてる荷物、皆で中に運んじやってくれる？」

日野「はい！」

友 造 「あ、」

あかり 「あ、」

日 野 「このマットレスは？」

尾 越 「料理人の住まいの家具ですよね？」

友 造 「あ、うん、そうそう。」

尾 越 「2階に運んじゃって。」

日 野 「この段ボールは？」

あかり 「あ、そ、それも2階にお願いします。」

尾 越 「あー、できたら明日も店舗のデザ

インを増田さんに見て頂きたいんですが。

全部お任せっていうのは僕初めてで、
出来てから、こんなんじゃないイメージ
違うよって言われたらどうしよう
と不安で不安で。」

友 造 「うん、僕らもしばらくこっちに居る
から、ここに居ないといけないかな、
というか、ここを離れられないとい
うか。」

尾 越 「はい？」

あかり「分かりました。ホテル泊まるとお金
かかるし、私たち、ここで寝泊まり
しますんで。」

○飲食店・2階住居（夜）

あかり「ちよつと、ちよつと、ちよつと！
どうすんのよー！」

友造「近くで怒鳴らないでよ。鼓膜破れた
らどうすんの？
だって、あ、いや、はい？って言っ
てたら、あれよあれよと、ねー。
えらいことになったよ。」

あかり「この嘘つき！詐欺師！」

友造「詐欺師って。お前だって、お美しい
とかお目が高いなんておだてられ
てさ、私もそう思ったのよ、なんて
言っちゃってさ。」

あかり「あれは、あんたがこんな事するから、
話合わせるしかないでしょ？」

お美しいなんて、最近言われたいし、
つい、ね。

増田さん？ってオーナー来たら、私
たちおしまいよ！

不法侵入とか、ほら何だっけ？住居
んー」

友造「住居侵入罪。」

あかり「そうそう。私たち捕まるんですけど
ー」

友造「見つかったら見つかったで、ここで
料理人として雇ってもらおうよ。」

あかり「不法侵入した人間を雇うと思う？」

友造「そしたら俺、土下座でも何でもする
から。」

あかり「友造が？やるわけないじゃん。」

友造「やるよ。もう行くところないんだもん。
土下座でも何でもやってやるよ。」

あかり「土下座で許されたら警察いらないわ
よー。」

友造「あーもう寝よ。疲れた。」

シャワー浴びて寝るぞ。」

あかり「あんた、良い度胸してるわね！」

○ 飲食店・店内（朝）

尾越「おはようございます。」

友造「おはようございます。早いですね。」

尾越「増田さん、いらっしやるうちに、全

部お打ち合わせさせて頂こうと思

います。」

友造「ちよつとまって。着替えてくるから。」

15

○ 飲食店・二階住居（朝）

鏡の前で化粧をするあかり。

友造「俺の服どこかな？」

（振り向くあかりを見る）

お前、目の上、何かあざ出来てるぞ。」

悔しがるあかり。

アイシャドウを落とすあかり。

○飲食店・店内（朝）

あかり「あ、おはようございますっ」

尾越「奥様、おはようございます。」

友造「お待たせしました。」

尾越「じゃあ、さっそくですが、外観はこんなイメージなんです。

（デザイン画を広げる）

以前ここは、昭和レトロな喫茶店だったの、その雰囲気を残しつつ、隠れ家的な、森の中に突如現れた、美味しい洋食屋、てな感じでどうでしょう？」

あかり「これジブリに出てきそう！」

尾越「そうです、そうです！」

絶対このお店うまいもん出すですよ、みたいな。」

あかり「頑固なオヤジが作る店ね！」

友造「誰が頑固なオヤジだよ。」

こだわりのあるって言って欲しい
ね。」

あかり「こだわり過ぎる人を頑固って言うん
でしょ！」

友造「美味しいもんつくるには必要なの。

こだわりが！」

尾越「あ！ジブリに、こんな夫婦いた！

（二人を指さす）」

友造・あかり「いない！いない！」

○飲食店・店内（午前中）

店舗の打合せ風景。

時計を見るあかり。

あかり「私買い物行ってくるね。」

友造「おー」

○飲食店・店内（午前中）

買い物袋から、食材を取り出すあかり。

お米をとぎ、ねぎ、イカを切る。

炊飯器をセットする。

炊きあがり、炊飯器を開け、かき混ぜ、器に盛るあかり。

あかり「皆さん、お昼ごはん出来ましたー」

尾越「我々も御馳走になっちゃっていいんですか？」

友造「妻が作ったの、まかない料理みたい

な、大したもんじゃないから、さ、どうぞどうぞ。」

あかり「お口に合うか分かりませんが、お召

し上がりください」

尾越「お言葉に甘えて、頂きます。」

匂いをかぐ日野。

日野「いい香りー」

手を合わせてから、ピラフを食べる尾越。

日野「うまっ！」

あかり「本当？良かったー」

尾越「うん、本当美味しいです！」

あかり「私、イカとシソの組み合わせが大好きで、和風ピラフにしてみました！」

尾越「奥さん、ここで料理作ったらいいんじゃないですか？」

あかり「あらー嬉しい誉め言葉！」

友造「いやいや、あかりのピラフも美味し

いけども、俺のピラフは絶品だぜ！」

尾越「あ、じゃ明日はそのピラフをお願いします！」

皆の笑い声。

○飲食店・店内（午後）

店舗の打合せ風景。

○飲食店・店内（夜）

電気コンロで、料理のメニューを試作する、友造とあかり。

○飲食店・店内（午前中）

昼ご飯を作る友造。
建築スタッフたちと、お喋りしながら昼食を
食べる友造とあかり。

○飲食店・二階住居（夜）

あかり「この生活に慣れて来ちゃったけど、
増田さんてオーナー、いつかは現れ
るわよね？」

友造「いつかは来るだろうなあ。」

あかり「どんな人なのかしらね。」

友造「尾越さんが言ってたんだけど、増田
さんてメディアに出ないから、どん
な人だろうか謎だったんだって。
俺が普通の人で安心したって。（笑）」

あかり「当たり前でしょ。」

友くんは普通なんだから。」

友造「なんか、やな言い方だなあ。」

寝巻で布団に入り電気を消す友造とあかり。

○ 飲食店・入口の外（午後）

見知らぬサングラスの男がバイクを止める。
ヘルメットを外し、店の方を遠くから見ている。

椅子の上に料理人募集の張り紙を置くあかり。

○ 飲食店・入口の中（午後）

入口のドアを開け、店内に入っていく男。

尾越「あの、どちら様ですか？」

そのまま奥へ進んで行く男。

振り向く友造とあかり。驚く友造とあかり。

サングラスを外す男。

あかり「あー望くんじゃない！」

友造「望？！」

望 「友さーん、あかりさーん！」

探したんですよ！」

あかり 「わーごめんねー望！」

望 「ひどいですよ、二人とも！」

黙って居なくなるんだもん！」

友 造 「わるいわるい。色々あってさ。

でも、どうやって俺たちがここに
いるって分かったんだ？」

望 「うちに来てたお客さんが、友さんた

ちに似た人をこの辺で見かけたっ
て言うから、探してたら、従業員募
集の張り紙出してる、あかりさんら
しき人見かけたから。」

あかり 「会いたかったよー（望を抱きしめる）」

友 造 「望ー（頭撫でてぐしゃぐしゃにする）」

望 「痛いー」

○飲食店・店内（午後）

内装工事の風景。

椅子に座って向かい合う望と友造とあかり。

望 「友さんの後、新しい料理人の人が来たんですけれど、手際が良いんですけど、ただ作業をこなしているだけっていう感じで。」

友さんみたいに、料理に愛情を込めてない感じで、僕料理が全然楽しくなくなっちゃって。」

あのお店、辞めちゃったんです。」

友造 「そうか。俺たち、あの店に居られなくなつて、ひよんなことで、ここのお店のオープンに携わる事になつてしまつて：

ちやうど腕の良い料理人を探していたんだ。」

望、お前がもし独り立ちしたいなら、ここをお前に任せたい。どうだ？」

望 「え、友造さんが店長じゃないんですか？」

友造 「この店の規模だぞ。」

お前一人で十分じゃないか。」

望 「僕なんかが、一人でお店を出来るんでしょ？

まだ調理補助しかやったことないのに。」

友造 「俺が教えてたろ。」

それに望には想像力がある。

お前のまかない料理美味しかったじゃないか。」

○（回想） 飲食店内厨房（昼）

友造の下で一緒に働く望。

望に料理を教える友造。

望 「友造さん。これ、味みて頂けますか？」

友造 「うん。上出来だ。（笑顔）」

望 「まかない出来ましたー」

美しい盛り付けの料理。

あかり 「望くん、美味しいよ！」

談笑しながら、まかないを食べる望と友造とあかり。

（回想終わり）

あかり「そうよ、望くんの料理とっても美味しかったもん。

望くんなら出来るよ。」

望「（照れる）友さんたちはオーナーってことなんでしょか？」

あかり「うん、まあ、ちよつと違うんだけど。」

友造「大丈夫。」

オープンするまで、みっちり叩き込んでやるから。

（望の背中を思いっきり叩く）

望「痛っ！：はい！（泣き顔）」

○飲食店・店内（午前）

望に料理を教える友造。

望にパソコンを教えるあかり。

仕入れ先から食材が届く。

調理補助のアルバイトが一人入る。

黒いエプロンを新調する。それに刺繍をするあかり。

カトラリーを揃える。

○飲食店・入口の外（午前）オープン初日
入口のドア開き、オープンの札を表に出すア
ルバイト。

○飲食店・厨房（午前）

友 造 「望。お前に言ってなかった事がある
んだが：、実は俺たち、オーナーと
間違われて、言い出せないまま、こ
こまでできてしまったんだな、これ
が。」

望 「え！：：どういふことですか？」

友 造 「だから：、増田さんていう、ここの
オーナーと間違われて、町田さんて
言われたのかと思って、はいって。
いずれ本物のオーナーが現れると思
うけど、上手くやってくれ。」

望 「え！：：ちょっと待ってくださいよ
ー！」

あかりの誘導で、最初のお客さんが入店する。

アルバイト「いらっしやいませ！」

友造「いらっしやいませ！」

望「い、いらっしやいませ！」

アルバイト「何名様でいらっしやいますか？

二名様ですね。こちらのお席にどうぞ。」

アルバイト「店長、オムライス2つお願いします。」

友造「お客様に美味しいもの沢山食べて貰

おうな。」

望「は、はい！」

フライパンでオムライスを作る。

出来上がった料理をお客様に出す望。

望「お待たせいたしました。」

美味しいと喜ぶ笑顔のお客さんたち。それを見届ける友造、店の外に出る。

○飲食店・入口の外（午前）

チラシを配るあかり。

店を見上げる友造とあかり。

看板には「あかり亭」の文字。

あかり「ほんとに私の名前で良かったの？」

友造「お前もこのお店に携わっただろ。」

俺たちの店が持てたら、この名前に

しようと思つてたけど、作ってやれ

なかつたから。」

友造の手を取るあかり。

笑つて見つめあう二人、再び見上げる。

あかり「望くんには、また悪い事しちゃった

けど。」

友造「あいつならお客さんに可愛がつて貰

えるさ。オーナーにも。」

あかり「そうだね。」

エプロンを脱ぐ二人。店を出る二人。

二階の住居はもぬけの殻。

○別の飲食店・店内（午前）

名刺を差し出す友造。

友造「私たち、飲食店のプロデュースのお手伝いを致します、コンサルティン

グをしている町田と申します。」

あかり「お店の開業までのお手伝いをさせて

頂きます。どうぞ宜しくお願い致します。」

○飲食店・入口の外（午前）

男が店内に入ってくる。

話しかけようとするがおののくアルバイト。

厨房まで進む男。

驚く望。

オーナーの増田だと望は気づき、怒鳴られるのを覚悟する。

増田「素敵なお店になったね。ありがとう。

君が料理人なんだね。

私はオーナーの増田です。」

望「芦田望です。どうぞ宜しくお願い致

します。」

増田 「長く入院していたものだから、任せっきりになってしまっただけ。

今日は体調が良かったものだから、のぞきに來ました。

そしたら既に開店しているので驚いてしまった。」

望 「なんかすみません。

連絡もせず開いてしまっただけ。」

増田 「いいんですよ。

任せるって言ったのは私の方だから。

そのお陰で、想像以上のものが出来上がりました。

亡くなった妻が、ここで喫茶店を営んでおりましたね。」

望 「そうだったんですか。」

増田 「誰か良い人が引き継いでくれたらっと思っていました。」

僕にも、皆さんが美味しそうに召し

上がってるオムライス頂けます

か？」

望 「はい！」

○別の飲食店・店内（午前）

メニューになる料理を作る友造とあかり。

黒いエプロンには、あかり亭の刺繍がしてある。

楽しそうに料理を考える友造とあかり。

おしまい